

私 唐手 術

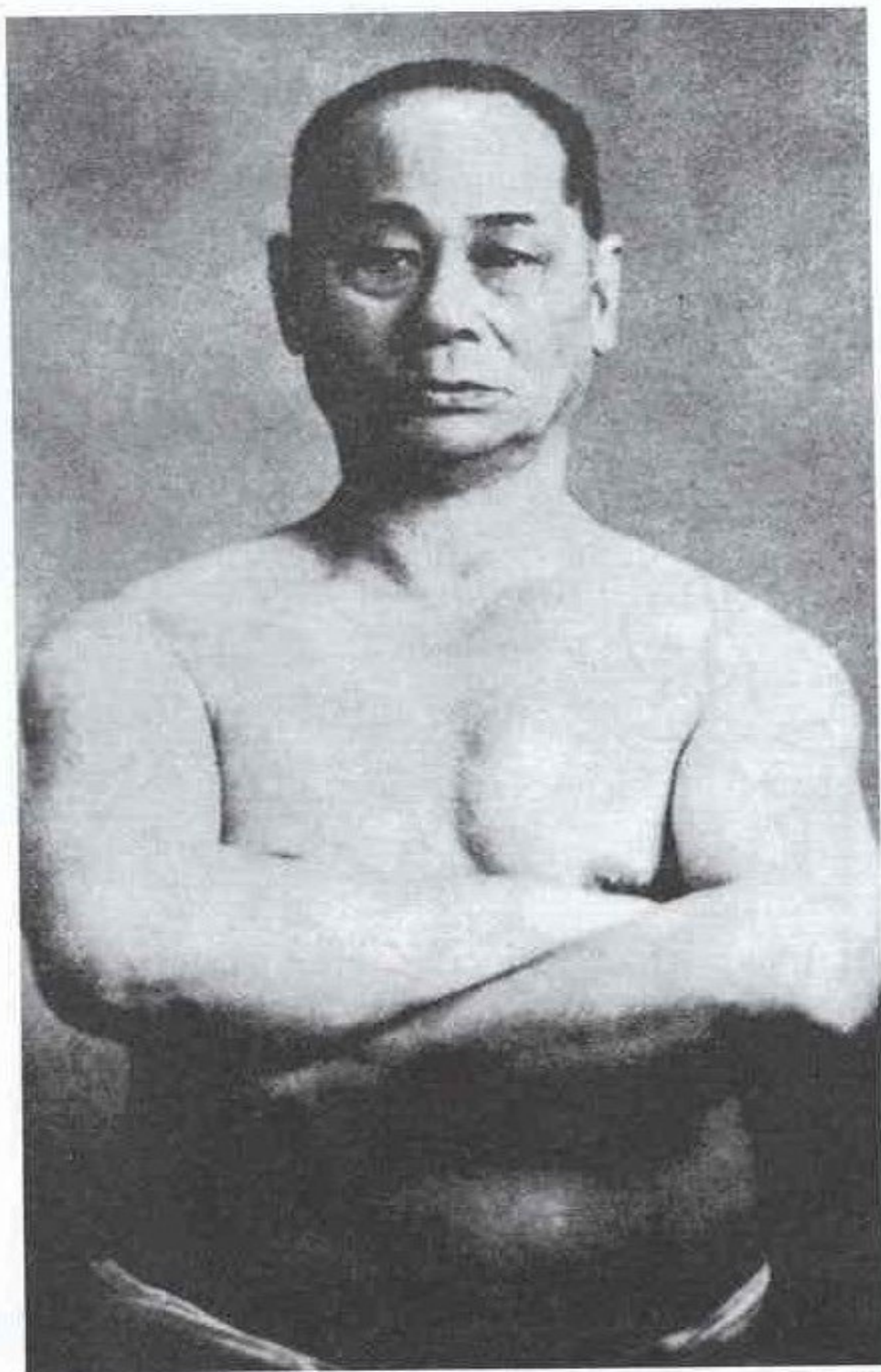


本 部 朝 基 著



MUSEUM

Hawaii Karate



実戦唐手家「本部の猿御前」と異名をもつ本部朝基、晩年の写真。

唐手術普及の黎明期に「琉球拳法唐手術・組手編」、「私の唐手術」を著し、唐手術の実戦性を体現した武術家である。

はしがき

私は、嘗て大正十五年の春、唐手術宣伝の爲、パンフレットを発行したことがあつた。其の後僅か数年、識者の理解ある同情と研究家諸君の不斷の努力は、唐手研究熱を急激に勃興せしめ、今や全国的なものに迄ならしめんとしている、斯道の爲誠に喜ばしき次第である。

亦最近社会生活の困難は、或は青年学生を無氣力にし、文弱に流れしめ或は亦其の言行徒に過激に走らしめるものがあるが、之は誠に慨歎すべきことであつて、かゝる際、尚武精神を隆にし、以て質実剛健の氣風を養ふことは極めて必要なことであつて、是れ社会に一面武士道鼓吹熱の盛んなる所以である。

今私が、既に二三の好著あるにも拘らず、且つ亦身の浅学非才をも顧みず、此処に筆を執るのは唐手術の真髓を示し、更に此の機運を促進せしめん爲であつて、若し大方諸彦の賛同を得れば筆者無上の光榮とする處である。

本書の出版に際して、多大の配慮と援助に与つた漢那朝常君、亦殊に題字揮毫の榮を賜つた男爵大井成元大將閣下、序文の勞を執られた渡口精鴻博士、杉山謙治教授に対しては衷心より感謝の意を表す。

昭和七年三月

東京小石川

著者誌

唐手の意義と起源

琉球、即ち沖縄に於ては、古来一種靈妙な武術が存在し、汎く県下に普及されて居る。これ拳闘術に非ず、柔術にあらず、それらに似て、而も全然趣きを異にし、独自の境地を行く唐手即ち空手である。それは徒手空拳、身に寸鉄を帯びずして、突く、打つ、蹴るの三方法を利用して、一撃克く敵を挫き、一蹴克く凶暴を制し、以て護身の用を全うし、安寧生存を確保する武術である。

一代の英雄ナポレオンをして、武器の無い東洋の一小国として驚嘆せしめたのは、是の唐手国沖縄である。

この靈妙至極なる唐手術は、何時の頃より、沖縄に行われて居たかに就ては、種々の説があるが、確たる文献がない為、判然していない。元來、唐手は、釈尊二十七世の法孫達磨太子が印度より遙々梁の国に至り、武帝と意合わす、去つて、魏の国に赴き、小林寺に入り、見性強身の説を立て、子弟の体育的精神的鍛鍊の為に創案教授せられたるに、其の源を発している。これが代々伝わり、支那古来の武術と合し、小林寺派拳法（小林拳）となり、他派と離れて独自の拳法分野を画してきた。其の琉球に入ったのは、慶長後島津家の琉球禁武政策と、四囲の事情より、琉球在来の武術と合し、取捨選択洗練の結果、唐手として隆々発達を遂げたものと思われる。

琉球における唐手の系統

古来、琉球に伝わる唐手は首里・那覇・泊の三系統に大別することが出来る。尤もそれは流儀が異なるという意味でなく、習練者の体質、その他の点より、各教授師範の方法を異にし、それが長い間の伝統となつて、伝わり来たつたのである。

古来、首里に於ては、稽古の初期は、六分の力でもつて習練し、ひたすら敏活を旨とした。那覇に於ては、それと反対に、十分の力を傾注して、専ら、筋骨の發達に意を用いた。泊に至つては、首里・那覇と趣きを異にし、一風變つた系統を伝え来たつたものである。薩藩前まで、泊港は琉球の第二貿易港であつたため、屢々支那・朝鮮等より、通交船が漂着することがあつた。それが、此の地には是等漂着者の群を收容すべき客舎を設け、琉球国王の命によつて、漂着者をこゝで歓待してゐたのである。従つて、長い年月の間には、泊の村人はその客舎に出入し、漂着者の群に加わつて居る武人より、唐手の伝授をうけ、ここに泊独特の拳法が発生したのである。然るに、上述の事を弁えずして、後人これが為に説をなし、これを琉球に伝わる唐流儀であると誤り伝え、且つ、その基本姿勢までも、根本から異なる様に流布するも、基本姿勢は、何れの場合も八文字立て、力の入れ方、足の扱い方など、全て同一で、その間少しも差異なく、何れも一得一失あれど、稽古者はたゞ敏活を期することが肝要である。

唐手の種類と変遷

唐手の種類は、余りに多く、中には忘れられたるもあり、又は現在行われざるもあつて、その消長発達も実に複雑で、世の変遷と共に唐手にも、よく流行せる型と、流行らない型の二種があり、従つて琉球に於ける分布状態も自から異れるかの感がある。先ず古来より、琉球に行われたるは、サンチン、五十四歩、セーサン、セーユンチン、一百零八、ナイハンチ（三段）、バツサイ（大・小）チントー、チンテー、ワンシユー、ローハイ、及び公相君で、尤も広く一般に行われたるは、ナイハンチ、バツサイ、公相君の三種であつた。

而も、琉球の拳法即ち唐手は、古来より支那から伝来し来たれるものであるが、サンチン、五十四歩、セーサン、セーユンチン、一百零八は、支那でもよく流行り、現在なお存在せるも、ナイハンチ、バツサイ、チントー、チンテー、ワンシユー、ローハイ及び公相君は、今や本存の支那では見ることさえ出来ず、只沖縄においてのみ、流行っているのである。尚、廃藩前までは、ワンシユー、ローハイの二種は泊のみで行われ、首里・那覇では、之を稽古する人もなく、廃藩後に至つて、首里、那覇でもよくこれを教えること、なつたものの、如く、平安に至りては、近世の武人糸洲先生がその子弟の教材に資せんため、創案せられたもので、実に沖縄独特の拳法で斯界のため大いに喜ばしき次第である。

拳法小則

(イ) 唐手の稽古……十二二歳を初期として、稽古を初むれば、いちじるしく発達をなし、且つ、組織的にもよく訓練さる、便宜がある。しかしやる気さえあれば何時から初めても出来る。なるべく、終身持続的に練習した方が、身体の為にも技の為にもよい。

(ロ) 唐手の稽古に志、又は研究中の者は、常に力の弱い方に力を尽し、稽古の時も、左手を多く役立たす様に心掛け、朝夕二回の稽古の時も、必ず出来る丈左手の力を増進せしめる様に練習を積みねばならん。

(ハ) 唐手の稽古をなし、且つ又武を練らんと欲する者は、常に起床の時も、床の上で坐り直ったまゝ、丹田にウンと力を入れ、両三回左右の両手を交互に平面或は前後左右に動かし、二本の手の發育に資するように力めねばならぬ。

(ニ) 苟くも、唐手の修業をなす人は、其の基本姿勢八文字立を忘れない様に、稽古の時に限らず、出来得る丈け、胸を張り、下腹にウンと力を入れて、姿勢を正し、決して、その姿勢をくずさぬ様注意せねばならぬ。永く唐手の稽古をよくせる人は、普通の人より、何れも体格が立派で、頑健であるのは、常に稽古の時、胸を張り、力を丹田に入れ、而も姿勢をくずさぬ結果、それが習慣性となり、次第に身体が、打てば鳴る様に鍛え上げられて、頑丈さを増して来たわけで、決しておろそ

かにすべきでない。

(ホ) 唐手修業者にして、往々稽古場の狭隘きようあひを論ずる者があるが、不心得ふこころも甚だしい、苟くも、武という精神さえある人なら、毎日朝夕二回、たとえ一間角の櫛くしの中でも、如何いかようにも稽古は出来るから、欠かさず修練するよう心掛けねばならない。亦復習という意味に於ても、練習者の必須条件であるから、常習的に試みるがよい。

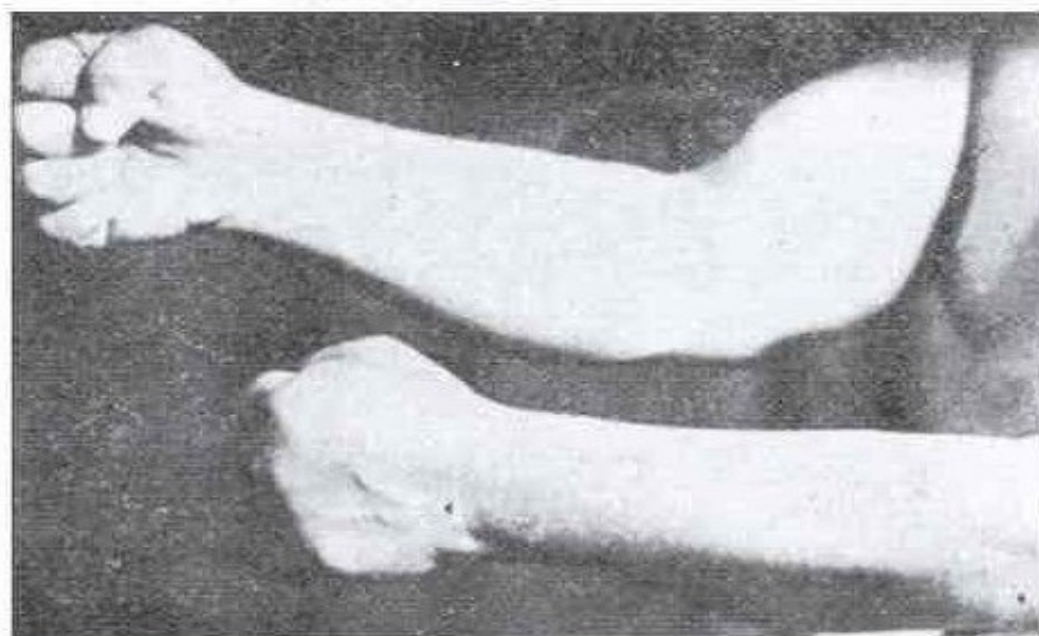
(ヘ) 唐手の修業者が、血氣に逸はなり、或は身を護らず、之を乱用して弱者いじめをしては、不心得も甚だしい。修業者は常に武という一字を体して、謙讓けんじょう克己こくきの精神で、終始武の觀念を寸時も忘れてはならぬ。

(ト) 唐手は、精神修養の一資料としても、実に有意義な世界的武術で、唐手を稽古した人は、精神の統一、鍛鍊が恐ろしいほど発達して、物事に動ぜず、自から沈着になる、此等ことうは禪学と相一致する所が有る。

拳骨（テージクン）の握り方

琉球の拳骨は、昔から唐手の基本姿勢が、八文字立と決まってる様に、拳骨の握り方も亦一定している。先ず握る順序を申せば、

最初に四本の指（人差指・中指・無名指・小指）を直すぐ延べ、指先より次第に畳むが如く深く握ると共に、親指を曲げて、人差指中指両指の上に横たわる様に力を入れておくのである。



上図は、握りたる拳骨の表裏を示したものである。

夫婦手の型

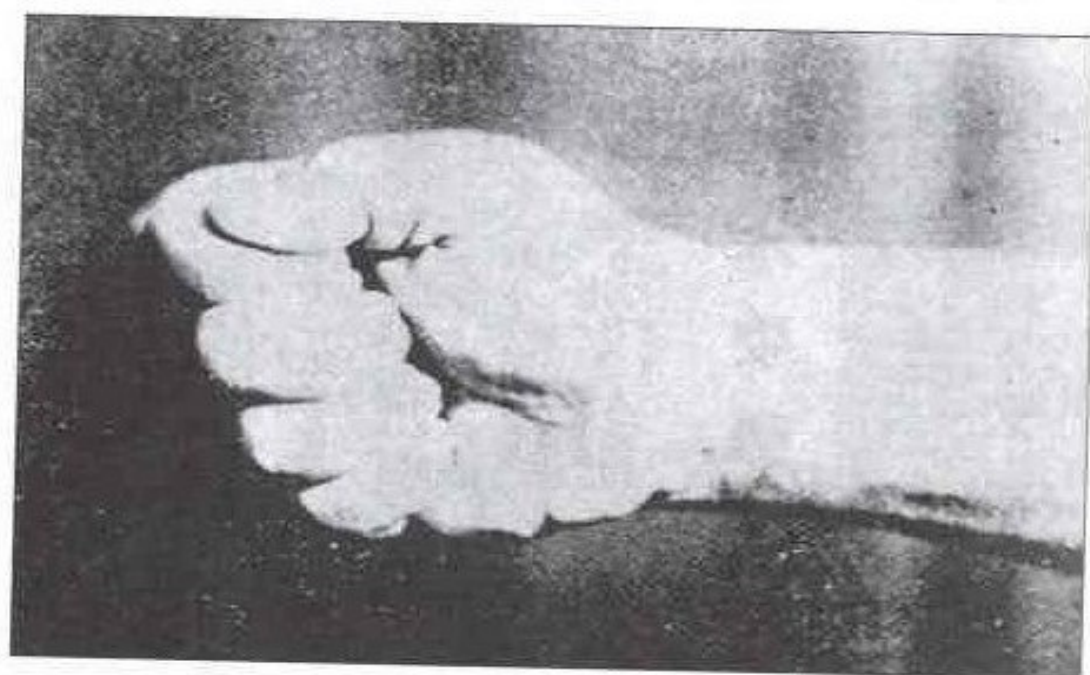
実戦の場合には、両手は常に前図の如く、くっ付けて置かねばならぬ。普通夫婦手と称して居る。この両手を如何運用するかと言へば、前の手は前線に立つて戦うので、攻撃もすれば防御もする、即ち突く或は敵の攻撃を受けはずと同時に、直ぐ突くので、後の手は常に予備として置くので、前の手で間に合わぬ時に、後の手を以て攻撃もすれば、防御もするのである。この構え方は、普通知らないようだ。よく構えるのに、片手丈け前方に突き出し、片手を脇腹に付けて、突く用意をなし、前の手を防御即ち死手、後の手を攻撃即ち生手と称して居る方もあるが、実際に適合しない考え方で、誤れるも甚だしいのである。

斯様な構え方では、実戦の場合に手後れとなるおそれがある。攻撃する手は、なるべく敵に近いのが有利で、結局敏活なる活動が出来るのである。この構え方が、組手に応用せられる、を見たら、其効果の偉大なる事を悟られるであう。

一本拳（コーサー）の握り方

琉球では、昔から一本拳の握り方も、不言不語の中に習慣性となつて、一定の法則に依りて、子供時代からよく写真に示すが如き、握り方で一本拳を握っている。

先ず最初に、中指無名指小指の三本を同時に曲げ、次に人差指を一層高く出し、指頭の横を親指で押えて、特に、親指と人差指に力を入れるのである。尤も、一本拳の時人差指を使うも中指を使うも任意であるが、自分の実験からすると、次図の握り方で、人差指と中指の二節で当てるように突いた方が効果がよいように思う。



基本姿勢と腰

唐手の練習上、常に心掛くべきは、其の基本姿勢と力の入れ方即ち腰の据え方である。

基本姿勢は、前述の通り、何れの場合と雖も八文字立で、八字形に爪先を開き、足と足との間隔は、人に依つて多少の差異はあるが、大凡一尺五寸位を基準としたらよからう、亦力の入れ方も、兎に角腰を据えて、下腹にウンと力を入れる様に、常に心掛けねばならぬ。この型は、人間が歩む時の自然の形からきたもので、巻藁の突方及びナイハンチ第三図の立方も、この八文字型である。

卷藁の作り方と其その稽古法

唐手修業者の必備品の中に、卷藁まきわらという稽古用具がある。拳骨の鍛錬に資するもので、これによつて数ヶ月鍛えられたら、拳はよく数枚の瓦や板を、一撃の下に粉碎することが出来る。

卷藁には、提卷藁きけりと立卷藁たちまきの二通りあるが、普通、立卷藁のことを単に「マキワラ」と称し、使用者も多いが、提卷藁は立卷藁のように常に使用されず、且つ使用する人も少ないのである。今其の作り方を詳述せば、

提卷藁は十束位の藁の中に五十斤程（一斤＝六〇〇g）の砂を入れ、長さ一尺五寸（一尺＝三〇・三cm）の四尺廻りにして、更に縄で固く巻きつけ、それを両端より提縄を掛け、上に吊るして突くようになってゐる。

立卷藁は、藁で平紐へいひもを作り、わらに巻きつけ、長さ一尺幅三寸五分程の所謂「マキワラ」をこさへ、これを卷藁木にくびり付けて、突くのであるが其の大きさは、普通左の通りになっている。

卷藁木は……一、全長 七尺（地上四尺五寸地下二尺五寸）

一、幅 三寸五分（後図の如し）

一、厚さ 上端 五分 下端 二寸五分

又立卷藁の一種で、重に両腕の發育に資するマキワラという、稽古用具もあり、余り一般には用

いられないが、特に、巻葉の形に注意しておく。この巻葉は、巻葉を四つにして、縦長三寸程の長さ七尺のものを地二四尺五寸、地下二尺五寸の割にて、地中に動なぬように埋め、厚さ一寸以上にして長さ一尺位のナキワラで細く巻きつけて、両腕を正面或は側面より打ちかけ、筋骨の発達に資する機になつてゐる。

尚、巻葉の突き方は、腕を出るだけ張り、人文字形に立ち、左右の両手を以て交互に突く、第一図（左手）第二図（右手）足も亦第一二図の如く、最初右足を突出して練習をやり、次に第三図の如く、左足を突出して前同様練習を繰返す。

茲に注意すべきは、巻葉の稽古の時、突の手が八分の力でいく時は、引く力は十分の力を必ず出して、稽古すべきで、左の手から始めねばならぬ。何となれば、何れの人にしても、左は右より力量において、常に劣つて居るもので、右が二十突く時は、左は三十回、右が三十回つく時は、左は四十回という調子で朝夕欠かさず、稽古する様心掛けねばならぬと思ふ。

亦第四図の如く、巻葉の横に立ち、手の側面を以て打ち練習す（右左共同様なり）。亦第五図の如く、足の稽古をなす即ち土踏まずと足指との中間を以て蹴るのである。提巻葉は主に足の稽古をなすに用い、踵及土踏まずと足指との中間指先の三方の練習をなす事を忘れてはならぬ。

尤も、提巻葉は、作り方が上下に自由に動く様になつて居るから、昔から足や手或は臂裏をもつて、便宜突いたり、又は打ちかけて、筋骨の發育にも資したものである。

卷藁の突方



上一図の如く右足を突出し、八文字形に立ち、腰を据え。
先ず左拳より始める。
最初、左拳を腕腹に図の如く構え、突き出すべし。
腕は途中より内側に捻り、手の甲が上方に向く様にし、人差指中指の四節を以て突く、充分打ち伸すべし。
引く時には、充分力を入れて出来得る丈け、肘を後方に引くべし。
但し突く時は八分、引く時は十分の力を入れる。



第三図左足を前方に突き出し、全て前同様。

但し、右利きの人は、左を右の二倍突くを可とす、猶お漸次熟練するに従い左右交互に突くように練習すべし。



第二図右手の突方。全て前同様。



五図は足にて突く場合にして、充分打ち伸すべし。



四図の如く、巻藁の側面に八文字形に立ち、腰を据え、拳の横面を以て突く練習をなすべし。是、亦左右共練習するを忘れるべからず。

練習器具

およそ、何れの運動に於ても、各其の性質に依りて形こそ異なれ、一定の練習用具がある如く、唐手の練習にも、亦欠く可からざる必要器具がある。然るに、その多くは、原始的時代よりそのまゝの練習器具で、文明の今日或は排斥する人もあらんも、此の原始的器具そこそ、唐手練習上欠くべからざる用具である。

先ず、初期の練習者に必要なものにして、力量の増進上、欠くべからざる物に、七十斤位（一斤二六〇〇）の卵形の石がある。それは毎日朝夕二回練習者が肩にかたげて、自らの力の増進を計る必要品で、それより段々力が増すと共に百三十斤程度迄の卵形の石を使用する様心掛けねばならぬ。

猶お、両腕の力量を増進せしめるために使用するに、チーシー及びサーシーがある。

チーシーは、円形の石か鉄を以て製し、真中に一尺より一尺二三寸位の木製の取り柄を差し込み其の柄の先を握りて、前後左右に差延べるのである。サイシーは錠前の形をなし、石で製したもので是れも矢張手の甲にのせ、前後左右に差延べて両腕の力量増進の練習をするので、其の斤量は各人の腕力を如何に依りて異なるが、何れも大凡十斤程度である。

稽古の心得

(まつむら　ながはま　いとすおう
松村・長濱・糸洲翁の話)

俗に能く、力武士という言葉が有るが、昔から唐手を稽古するに、其の方法と心條が、師に依つて大分異なる様である。此の事は、余程肝要な事で、現在も心得違いをして居る人々がある様で、殊に今後唐手を稽古する方々のために、特に申し上げて置きたいのである。那覇の長濱先生が、首里山川の松村先生をほめた話を例に引いて申上げたい。

松村先生は、長濱先生よりは少し先輩であるが、中々ゆとりのある武柄で、決して力一方の武士ではなかった。而して常に靜中動きを觀て運用自在であつた。私も久しく松村先生の許にはかよつて、教を受けたが、常に其の型の稽古は力の入れ方及び型の運用に意を注いで居られた。其れは確かに其の通りで、私も今日迄其の教えを遵奉して来て居る。たとえ力は他人に秀れ、身体は堅く鍛えてあつても、充分に其の技の運用を会得して居ないと、咄嗟の場合に、敏速なる活動が出来なくなるので、其の武は何等のやくにも立たなくなる。そこで糸洲先生はと言えば体格と言ひ、武力と言ひ、確かに傑出した武人で実兄が稽古する時には毎日の如に拙宅へ御出になつて居たので、私も十二三歳位の時から、一所に稽古した居たところが、私は何時も兄にいじめられて居たので、どうしたら兄に勝つ事が出来るかと絶えず考へて居たので、遂に糸洲先生丈けでは、あきたらず、儀保の佐久間先生や松村先生の許に、ひそかに通ひ、種々と研究して、二十歳位からは確かに兄に勝つ

自信があつた。それでも糸洲先生の許へは、時々伺つて種々と批評を受けて居たが、先生が私を認める様になつてからの御話であつたが、長濱先生の遺言を打ちあけて話された事がある。

元来糸洲先生は、最初松村先生に教えを受けて居られたが、如何にも糸洲先生は鈍重で、先生の氣に入らなかつた。そこで熱心に稽古をするけれども、肝心の師の方でおろそかであつたので、遂に退いて那覇の長濱先生の許に通うことになった。長濱と糸洲は、一つちがいであつたが、子弟の關係を結んだのである。長濱先生は其の当時相当に名の売れた方であつた。非常に熱心家で常に庭先で朝早くから、稽古を初め、夕日が大分西にかたむいて、稽古する影が妻君の機織はたにかゝる時を以て止められたそうである。

処が先生は松村先生とは反対に専ら力を出し、身体を堅める方に専念して、稽古をして居られた。それで、その先生が自分の死に臨み、高弟の糸洲先生を枕頭に呼び「私は是迄で、力一ぱいに稽古をさせたが、実際の場合と言う事を一寸も考えず、自由と敏活を欠いて居る。今日になつて深くさとする処があるから、今後は是非松村について研究して呉れ」と遺言されたそうである。誠に心すべきである。

繰り返して言うが、稽古するには其の理を解して、基本の練習をやれば、自然と筋肉が練れて相当に堅くなるもので、運用と敏活と言う事を充分に理解しなければ何等のやくに立たない。

ナイハンチの型と誤伝

ナイハンチで、足を八文字に開く型が有ることは、既に御承知のこと、思う（ナイハンチ三図参照）此際足このさいのヒラをスポメて、内側に締付ける様に力を入れることを現今普通一般に教え、且つ世人も之れが正当の如く考えが、誤れるも甚だしい。此の型は専ら糸洲翁の流れを汲む方々の教え方で、松村翁や佐久間翁などは、只足を八文字に開く丈けで力を取る様に教えられていた。此の点は自分も最初非常に疑問で、松村翁や佐久間翁に審たづねたことがある。

松村翁は、「糸洲の亀小型では、實際立ち合う場合には、頗すこる危険で、すぐ倒されてしまう」との御話であった。つくづく思うに、私も松村翁の御説に従いたいと思う。先ず試みに糸洲流で八文字に立ち、足の裏をスポメている人も背後から手の先で一寸押すと、容易たやすく倒れる。斯くしては、如何に力を入れてかまえていても、何等の効果もない。型はなるべく実際に近い様に教うべきもので、強いて力を入れんが為に、實際とかけはなれた型を世にのこすことは、余り感心出来ないと思う。それで、自分は此の足の裏をスポメることには断じて賛成出来ないと同時に、其の誤れることを敢て広く世人に明かにしたい。

ナイハンチの初段

ナイハンチは全部で三十三挙動よりなる便宜上二二三の号令を掛け順次動作す。



第一図
用意の姿勢。
下腹部に力を入れ、姿勢を正しく、正面を見る。
この構え方は全身力を入れ、護身の意を表せる型なり。



第二図
右側面を見ると同時に、左足は軽く右足を越して、図の如く、交叉す。但し右側よりの攻撃を、一步踏み込んで受けると同時に、戦闘開始の準備なり。



第四図

三の呼称で、伸ばした手で掴まえて引寄するが如くに、同時に、左肘を以て敵を突く様に図の如く動作す。但しこの時、肘を胸部より、五寸程はなし、上体は右向きにし、下体をくずさぬ様注意すべし。実戦の場合は、左肘を以て突くにあらず、左の拳を以て突くべきものなり、型なればこそ、ていさいよく、かくせるなり、注意すべき事なり。



第三図

二の呼称で、右手を右へ伸ばすと同時に、右足を右へ図の如く踏み出し、左手は握りながら脇腹に取り、充分後に引く、上体の姿勢はくずさず、腰に力を入れ、足は乗馬するが如く、両脚の外側より中の方へ、力を締込むような心持ちで踏み張る、前述の通り、八文字型に変化したるを見よ、足の間隔は、一尺五寸位とす。目は敵を正視する。

この時打ち、伸ばしたる右手は、敵の攻撃を受けると同時に突き込み、而して敵の手を握る意味を含む故手首より先は裏がえす様な動作をなすべし、足を踏み出すは、敵を蹴上げる意なるべし。



第六図

五の呼称で、前の姿勢をくずさず、其のまゝ左手を膝頭の前に打ちおろす。

敵、足を以て、蹴たおさんとせし故、足をはらう意なるべし。



第五図

四の呼称で、拳と拳とを、右脇腹の処に左を上重ねると、同時に左側面を見る。但しこの時体を正し、左肩が上がりぬ様注意すべし。これ左側面の攻撃に移る構えなり。



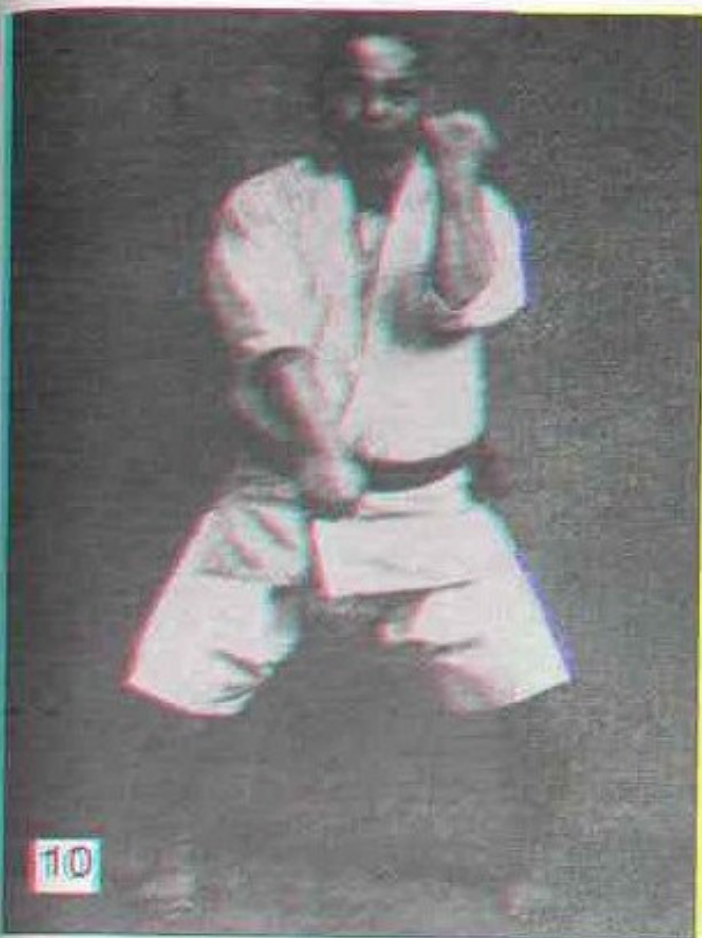
第八図

七の呼称で、六の姿勢をくずさず、
其のまゝ右足を左足の上より軽く
越して交叉す。
但し側面へ進むの準備なり。



第七図

六の呼称で、左手を捻じ上げると
同時に右手を図の如く突き出し、
上に重ねる。但し右の腕は、水の
流れるが如く、肩より次第に拳を
下げる。但し腕と胸との間隔は、
凡そ五寸位。
この型は側面の敵を突く意なるべ
し。



第十図

九の呼称と同時に、右手は下に打ち落とし、左手は手先で円を描くが如く外側より上部に打ち上げ、上図の如き姿勢となる。

此の間なるべく早きをたつとぶ。但し組手九図はこの型の応用なり。

この型は敵のつゝ込み来るのを、我れ右手で下へ打ち落とす。



9

第九図

八の呼称で、左足を一步左へ開くと同時に、右腕を図の如く起し、目は正面に復す。但し拳は目より低く。面と拳との離れは約一尺、脇と肘との離れ凡そ五寸位と心得るべし。

足を踏み出すは側面の敵を蹴たおす意なるべし。



第十二図

十一の呼称で、左側面を見ると同時に上図の如く、左足を以て前面を払うが如くして、足を元の位置に復すこれ前面に蹴込む意なり。



第十一図

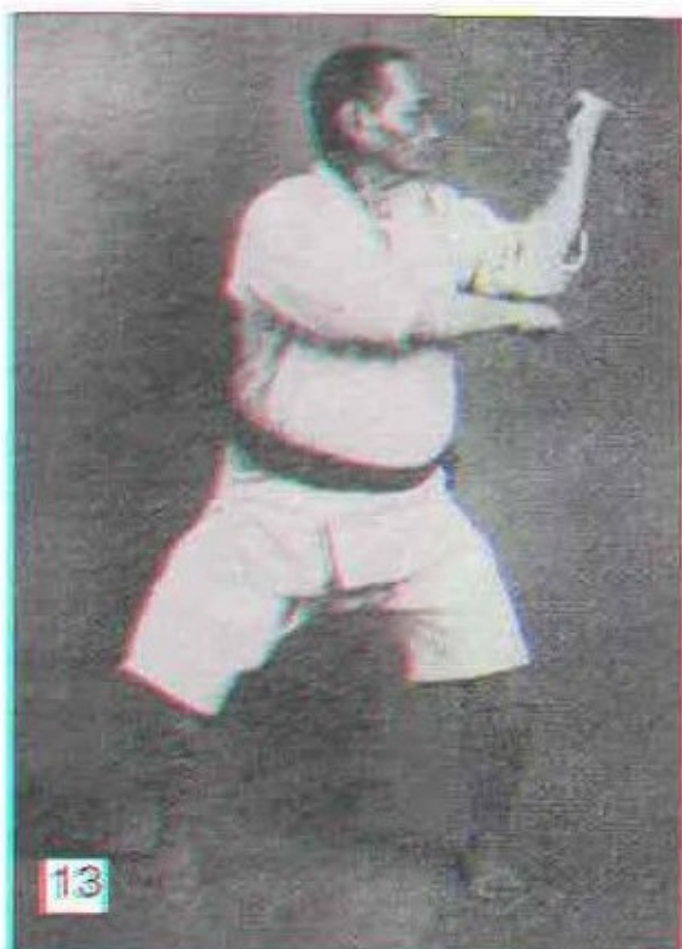
十の呼称で姿勢をくずさず。左の拳を以て前面の敵の顔面をなぐるが如く、充分に打ち伸すと同時に、右の手首に左肘をのせる。同時に、左拳を以て敵の顔面をなぐる意なるべし。



第十四図

十三の呼称で、右側面を見ると同時に十二図と同じく右足を以て、前面を払う如くし、足を元の位置に復す。

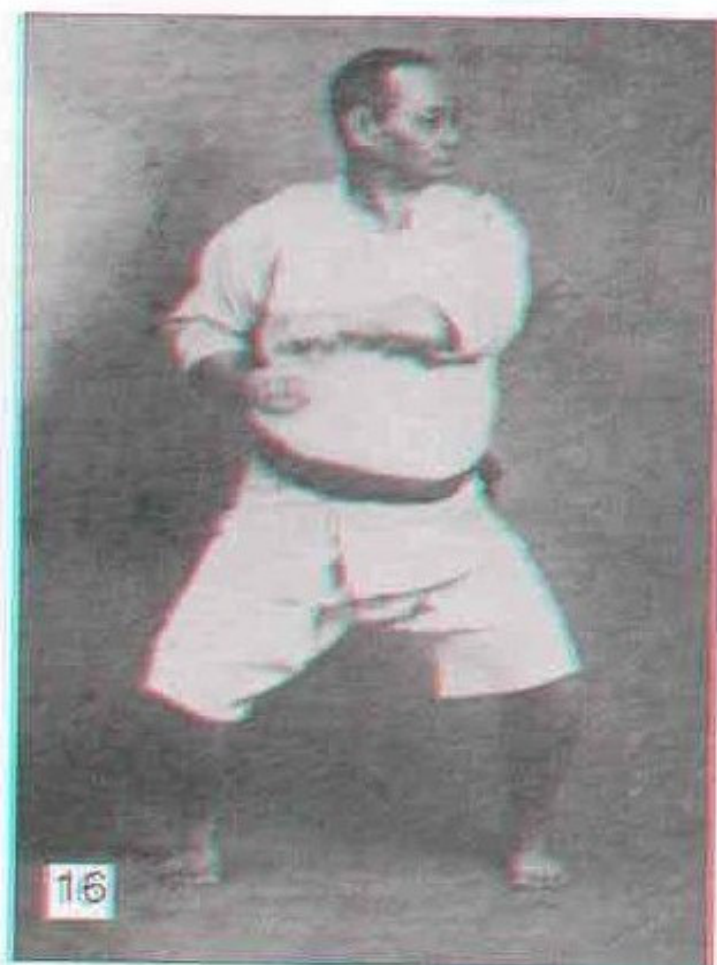
足を払うは、前面に蹴込む違なり。



第十三図

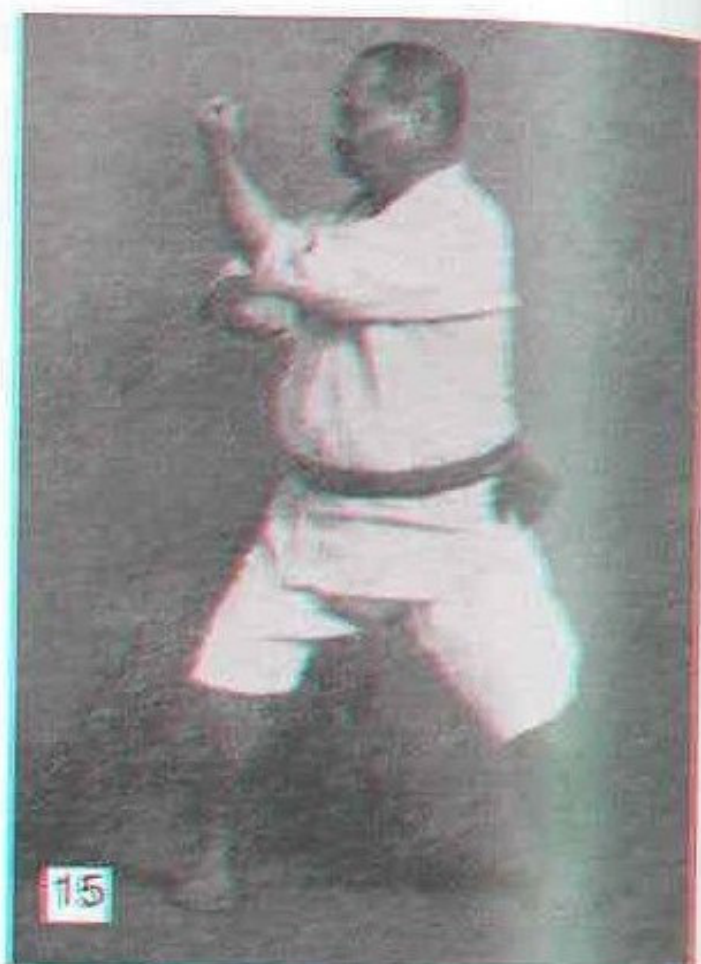
十二の呼称で、上体を左に捻て側面より突いて来るのを受ける。

この時、よく腕を捻じる様に教える人あるも、誤れるも甚だし、何んとなれば手の甲を以て受る法無し、注意すべし。



第十六圖

十五の呼称で、拳と拳とを圖の如く、右脇腹の処に左を上を重ねると同時に、右側面を見る。但し肩が上がりぬ様、注意。これ次の動作の準備なり。



第十五圖

十四の呼称で、上圖の如く、右側面より突いて来るのを上体を捻って受ける右手は防護の意とす。



第十八図

十七の呼称と共に、右手を右脇腹の処に強く引くと同時に左手を上捻りながら手を圓の如く開く。左手で敵を握む意なるべし。



第十七図

十六の呼称で、重ねたる両手を姿勢をくずさず左側面に突き出す。これ敵より突き込まれたるを受ける意、所謂夫婦手を型化せるなり。



第二十図

十九の呼称で、正面を見ると同時に、両手を左脇腹の処に上図の如く組む。



第十九図

十八の呼称と共に、図の如く上体を左へ捻り右肘を使って突く。但し下体の姿勢を崩さぬよう注意すべし。



第二十二図
二十一の呼称で、図の如く右脇腹に、両手を組む。



第二十一図
二十の呼称と同時に、右側面を見て、右手を図の如く、打ちおとす。



第二十四図

二十三の呼称と、同時に、右足を一步右側に踏み出す、足と足との間隔は、約一尺五寸より二尺位とす。



第二十三図

二十二の呼称で、姿勢を崩さず右側に移動する準備として、左足を右足の上に軽く越して交叉す。



第二十六図

二十五の呼称と同時に、左手を右肩の前より、打ち下し、右手を左肩の外側より打ち上げる気持ちで敏速に動作し、図の如き姿勢になる。



第二十五図

二十四の呼称で、正面を見ると同時に左手を図の如く起す。但し拳は目より少し下位に。肩との間、約一尺五寸位。前面よりの攻撃を内受する意なるべし。



第二十八図

二十七の呼称で、右側面を見て姿勢を崩さず右足を以て図の如く前面を蹴上るように払い、足を元の位置に復す。

第二十七図

二十六の呼称で、左腕を図の如く、前面に構え同時に右手の肘をささえると共に、右腕を充分に前方に、打ち伸して元の位置に復す。



第二十九図
二十八の呼称で上体を右側に捻じ
下体を崩さず右側よりの攻撃を受
る。



第三十図
二十九の呼称で左側面を見て左足
を以て前面を蹴上る如く払いて足
を元の位置に復す。



第三十二図

三十一の呼称で、前面を見ると共に、腕を図の如く、左脇腹に構える。



第三十一図

三十の呼称で、上体を左側に捻じ左側よりの攻撃を受けるように図の如く腕もろ共に廻す。



三十三の呼称で、右足を引くと同時に正面を見乍ら両手を引いて最初の姿勢に復す。



第三十三図
三十二の呼称で右側面を見て、左右両手を以て突き出す。

かまえの心得

普通能くかまえというて、種々型が有るが、是は一片の形式である事を、承知して置いて貰いたい。然らばといつて、全然排斥すべきものではない。実戦の場合には、必ず左様にかまえるべきものかと問う人が有つたら、否然らず、かまえに形無しと申したい。余は心にかまえはあると主張するのである。臨機応変、とつさの場合に処する心掛けが、平日から肝要で、是のかまえが好いかあのかまえ方が好いとか一概に申さるべきものではない。要はたゞ、平日から武力を練ると同時に、精神を練るにあるので、大いに心すべきことである。

唐手に先手なし

「唐手に先手なし」という言葉が有る、人によつては、其ま、文字通り解釈して、能く「先手し
てはいけない」と教える方々がある様だが、余程考え違いをしていると思う。なるほど、武道精神
というものは、決してみだりに人をなぐるために稽古するものではない。心身の鍛錬が、第一の目
的でなければならぬ事は、既に承知している事と思う。そこで、此の言葉は、やたらに危害を加
えてはいけないと言う意味であつて、余儀ない場合、即ちさけても避けられぬ場合、敵が真に危害
を加えんとする場合には、猛然と立つて戦わなければならぬ。苟くも戦いに臨みては、敵を制する
ことが肝要で、敵を制するには、最初の一手で制して置かねばならぬ。だから戦いに臨みては、先
手でなければならぬ。大きに心すべきことである。

組手

琉球拳法唐手は、基本と組手の二つに分つことが出来る。基本とは、唐手の基をなすので、俗に型と称え、(ナイハンチ、パッサイ等) 初心者にもこれをよく教えるのであるが、組手は柔道に於けるキメの型にやや似て、一句ずつ連続的になつて居り、琉球語の手を組むということから転化して組手と称するようになったものと思われる。尤も組手は、琉球に於ては、古来より行われたのであるが、未だ一定した型というものがなく、尚文献にも残っていないのである。そして組手に対する参考書と称するものもあるが、その多くは支那の武人が編成したものを書写して武人仲間に珍重がられたもので、琉球独特の組手は実に未だ編成されていない。元来唐手は剛術であるため其の技が未だ充分でない人には試みることにすら危険が伴うのであつて、一通り基本の教習を卒えた人が互に受けはずしを試みて、稽古することが出来るのである。そのため人に依つて色々変化をするものであつて決して制定した組手の型というものはないのである。されば組手を稽古せんとする人は、常に敏捷を旨として相手を選び、よく「受けはずす」ことを稽古すれば自と組手の稽古をしたことになるから、自らの技を上達を期するのが、尤も肝要なことであらうと思われる。



第二図

第二の如く相手の手首を強く引くと共に右拳を以て相手の胸下を突けば勝となる。

左手で胸ぐらをつかんだ時亦同じ。



第一図

相手が右手を以て胸ぐらをつかんだ時左手を以て相手の手首を下方より握る相手が顔面を突かんとした時、少しかゞみ、右腕を深くつゝ込みて受上げると同時に、



第三図

相手が、前と同様に、右手を以て胸ぐらをつかんだ時、左手を以て相手の手首を下方より握り、右手を以て腕を握り強く引き寄せると同時に、



第四図

図の如く、右手の指を延ばしたまゝ図の如く手刃を以て相手の脇腹をなぐる。但し左手を以て胸ぐらをつかんだ時亦同じ。(勝手)



第六図

相手は非常に不利の立場になる、相手の右手を強く引くと同時に、左拳を以て図の如く横胸を突く。



第五図

前図と同じく、胸ぐらをつかんだ時、同じく右手を以て相手の手首を握り、少し体をかわしてそとにそらす。



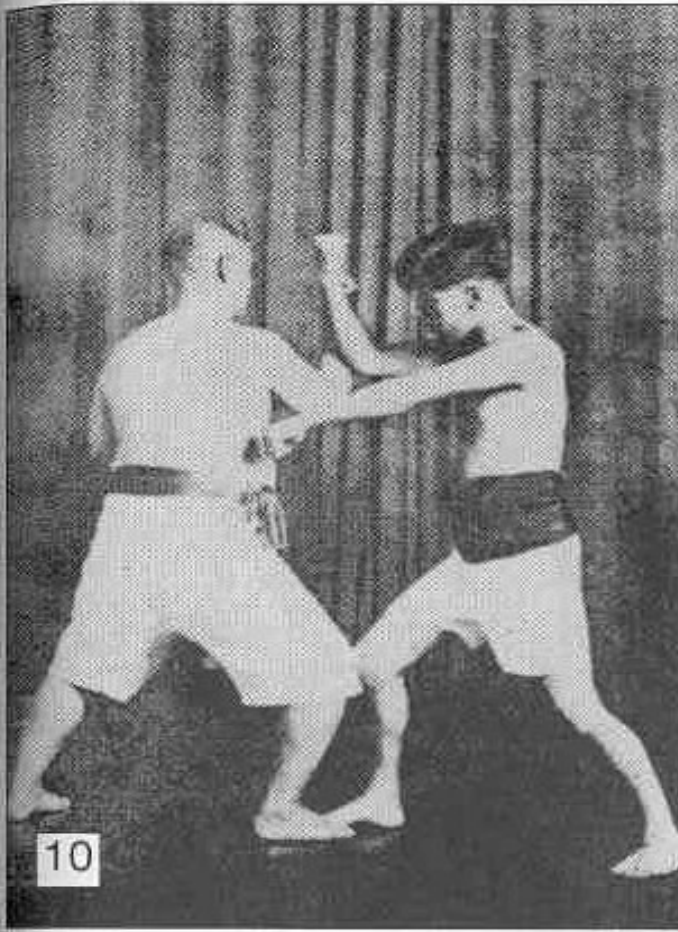
第八図

相手が左拳にて我顔へ突き来る時、右腕を深くつつ込みて図の如くして受けはずす。この時左手は予備として右手に附ておく。



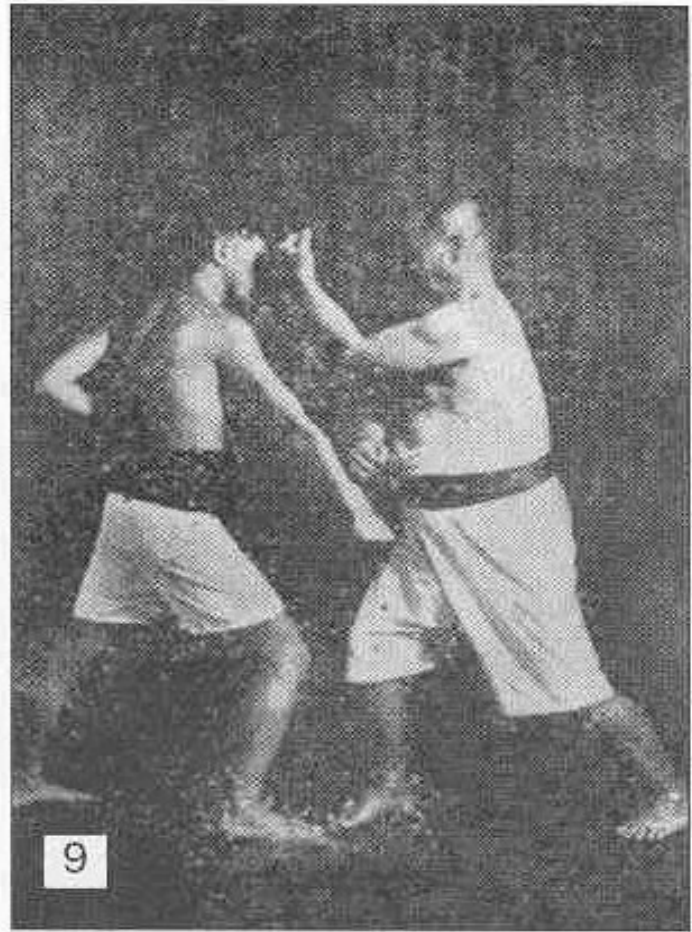
第七図

相手猶ひるまず、左拳を以て突かんとする時、相手の手首を充分に引きながら、左手をつっ込んで図の如く、相手の左腕をおさえること恰も弓を引く気持で左右の腕を引くべし。相手猶ひるまざれば、相手の手首を下に押すと同時に自分の左腕を上げれば相手の腕は折れるべし。



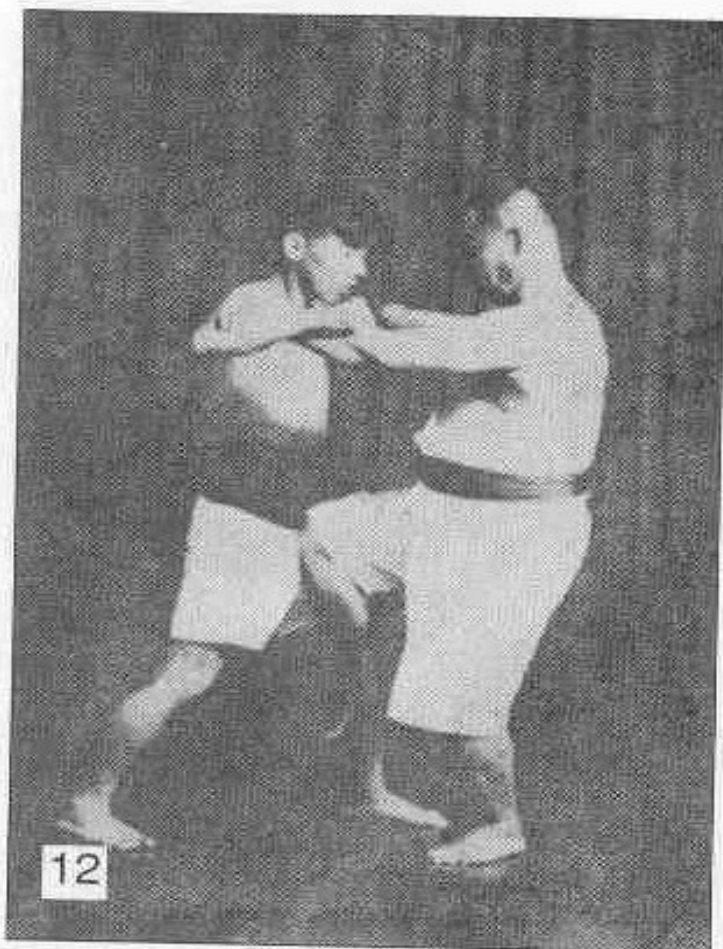
第十図

互いに右手を組み、構えて居る時、
相手左拳を以て横腹を突き来る。



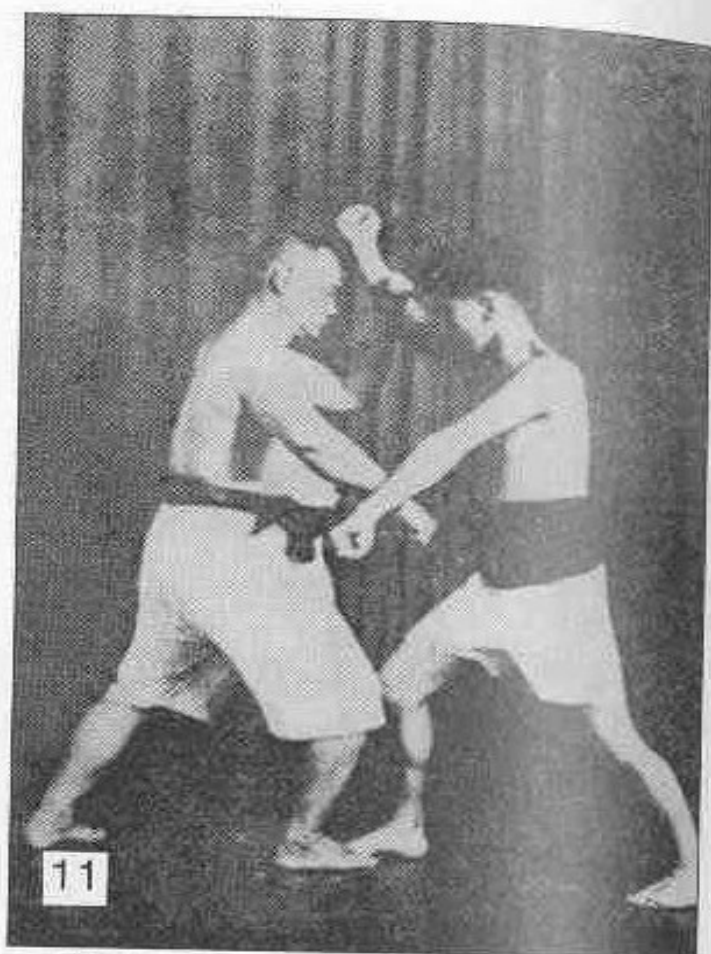
第九図

相手なお右手を以て突きくる時、
我れ右手を以て打ち落して受け、
左拳を以て相手の顔面をなぐる。



第十二図

受けたら、すぐ図の如く両腕を握り、ひざを以て相手の臍を突く。



第十一図

其の時上体を少しかわして、上図の如く受けると同時に、右手拳を以て突き来る時、左手を以て内受す、尤も左手を予備として常に右手に付けてなければとても受けられるべきものにあらす。



第十四図

左手首を握り上げると同時に、右足を踏み込み、肘を以て図の如く胸を突く。



第十三図

相手突き来たら、受けるとすぐ左手首を握り上げ、右足を踏み込み右手を以て掌を握る。



第十六図

相手の左拳を以て突き来る時、矢張り体をかわして左腕を以て外受し、尚左足を以て蹴込みたる時、矢張り左手を打ち下して受け、右手を以て横腹を突く。



第十五図

我が顔を突き来る時、我れ上体を相手の右側にそらし、外受して相手の脇腹を突く。



第十八図

急に上体を捻じ、左手を以て相手の右手を外より受けかえると、すきが生ずる故、すぐ胸を突くべし。



第十七図

右と右とを組める時、相手右拳を以て突き来る時、



第二十図

両腕を張るが如く力を入れて、少し腰を据るとゆるみが出る故、図の如く手をまわして拳を握る。



第十九図

後より不意にだきしめられたる時、

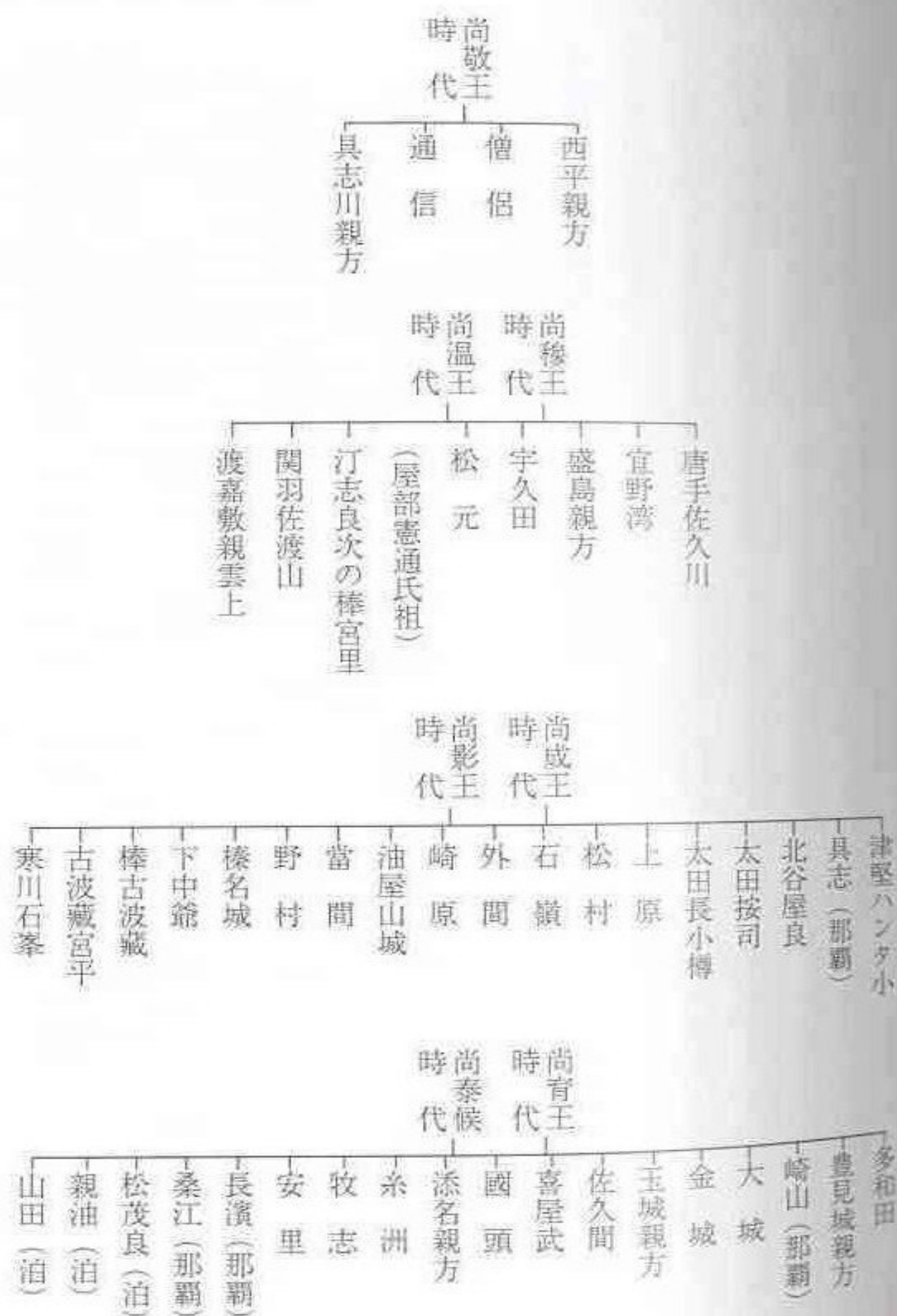
琉球の生める武人とその特技

琉球の拳法唐手は、伝統的のもので、何時の頃より、克くこれを研鑽せるかという事に就ては、本存の琉球の文献にもなく且つ之が考証となるべき何ものもない。茲に列伝的にものする武人伝も、実に著者が古老より聞き伝えたる、三百年來の武人に過ぎないのである。之を年代順に列記すれば、首里では、西平親方、僧侶通信、具志川親方、渡嘉敷親雲上、唐手佐久川、宜野灣殿内、真壁チャーン、宇久田、松元、汀志良次の棒宮里、関羽佐渡山で、降つて津堅ハシタ小、北谷屋良、太田按司、大田ノ長小樽、上原、松村、赤平の石嶺、外間、本村、崎原、油屋山城、当間親雲上、野村、棒名城、下中箒、寒川の石嶺の順で、ごく近世になつて大城、金城、多和田、豊見城親方、玉城親方、佐久間、喜屋武、国頭、添石親方、牧志、糸洲、安里、筑佐事、儀間等で、那覇では具志、崎山、長濱、桑江等が著名な武人であつた。

尚その外、泊の松茂良、親泊、山田の三人があり、久米に、村山、城間村に棒古波藏、古波藏村に宮平という突手の名人が控えて居たのである。

尚その他にも、十把一束の所謂、自称唐手の達人は数えきれない程あつた。今各人に就き、其の特技を紹介すれば（年代順序不同）

西平親方は、俗に佐部親方と称し、現在首里護保の西平の先祖で、唐手の外に槍をよくしたと



いう。

具志川親方は、唐手の達人であつたと同時に、木刀の名人で、当時琉球の剣術家であつた。

通信は、今より約三百年前の人で西平時代の武人で、唐に於て斯道の研鑽を積み、身は僧侶であり乍ら、當時に於て琉球の武人仲間でも一二を争つたという、而も彼は凡ゆる武術に秀で、人を圧する程の力量があつたと伝えられる。

渡嘉敷親雲上は、人も知る琉球随一の奇人で、武人というよりも寧ろその奇行を以て知られている。彼は又狂歌をよくし、徳利を手の掌で一撃のもとに打ちくだいたという。

唐手佐久川は、琉球の過去における、所謂武道の一面線とも称さるべき人で、彼の後には彼なく、後世の世に称せらる、人で、力量その他の点に於て、彼の右に出る程の人はなかつた。而も彼は人も知る如く、三角飛びの名人で、人と立ち合う時など、目にモノ見せぬ程の早技で、三角の壁を些のゆるみもなく蹴上げて平然たりとは、実に恐るべきである。津堅ハンタ小、下中爺は、棒の達人として知られている。

宜湾殿内は、有名な宜湾朝保の父君で、体軀巨大、身の丈六尺三寸余、体量実に二百三十有余斤で、怪力の持主として当時の人に称われ、七寸廻りの長サ七尺余のかごの棒でツバメを打ち落す術に長じていた。彼宜湾が正しく膝まづく時は、悠に大人一人をかくすことが出来たとのことである。

真壁チャー小は、身の丈五尺三寸、体軀肥満の人で、一見鈍重な人と見えたが、武で練つた人だけに、チャー小、の異名がよく示す如く中々身が軽く、あだかも雄鶏（チャー）の様に前後

左右に飛び廻ったという。現に眞壁御殿は、当時のまんま家屋敷も残っているが、同家の表座敷の天井には、昔彼が足裏に油をつけて蹴り上げた跡方がいまだに残っているのを見る、如何に彼が身軽く飛切の術に長じていたかということが首肯されるであろう。

関羽佐渡山は、その名の示す如く美髯の持主で、古の唐の関羽もかくあらんと言われた程、関羽に似通える所があつたという。而も彼は唐手をよくすると共に、槍の名人としても聞えている。上原は釵の名人であつた。

本村は、棒の達人として斯界に名を馳せた人である。彼は又実に偉丈夫の典型ともいい得べく、六尺棒を押ツ執つて敵に向う如き、四邊に人なきが如くであつた。その一例に彼は室の両壁に僅かに棒が這入るほどの穴を穿ち自分は室の中央に立って棒を左右に振り立て、件の穴の中に差し込んで、百発百中、一回たりとも誤つことがなかつたそうである。

崎原と外間は、二人同時代の人で、共に強力無双の人として知られている、殊に外間は松村と共に、薩摩の人伊集院氏より剣道の指南をうけ「打ち込み」の達人であつた。

宇久田と松元は、突手として知られている。

太田按司は、弟長小樽と共に、強力の所持者としてのみならず、智勇兼備の武人であつた。

赤平の石嶺も、強力の持主であつた。

この外にも、当時の武士としてその名を知られている人に、

油屋山城は、余り世人には知られないけれども、態々支那に行つて、唐手の研究をなした程の人

で弓にも長じていたという。

松村・当間・野村は、共に同時代の武人であつた。松村先生は、人も知る豪勇無隻むせうの人、氏は武士、名は成達、自ら雲勇と号し、足を自由に扱い、よく蹴り上げることに妙であつた。時に、同輩の人が背後から抱き止めて彼を試みんとした時、彼は手の自由を失い乍たちらも、自由に足を左右に蹴上げ、背後より抱き締めている人を蹴倒したそうである。亦剣客でもあつた。一説に依ると、彼は叔父某の仇を報いる為め、態々支那わが国に行つて唐手を学び、且つ剣術の指南を薩摩の有名な剣客伊集院氏より受け、其の奥儀を究めたという。彼は武をよくしたのみならず、当時の秀才で、書家としても一家をなし、文人画をも克よくした。二十歳の頃より、尚影王の御側役であつたが王が御悪戯が好きて、嘗て闘牛と試合した事がある。

當時有名なる猛牛があつて、御別荘に飼われてあつたが、先生は王の御悪戯を予期して居たので、早速牛舎に行つて見たら案の状猛牛は人を見たら、足を踏み鳴らし、鼻息荒く突掛つてくる。先生は最初の程拳骨で突てみたが中々弱らない、益々猛烈な勢いで突て来るので、今度は持っている扇子で突掛つて来る度にその目をなぐつたら、さすがの牛もへこたれて仕舞つた。先生はそれから毎日牛舎に行つて、それを繰り返された。吾々は此処に武人の用意周頭しうとうさを知ることが出来るである。即ち、先生は前以て牛の弱点を知り、亦牛にもそれを知らしめ、そして恐れしめたのである。

処が王は案の状、闘牛との試合を先生に命ぜられ、先生はお受けした。愈々当日いよいよになつて闘牛場には柵をめぐらし観衆は片咳を呑んで待つてゐる。例の猛牛は両方より縄を付け引張られて登場し

た。先生はと見ればいつもの通りの服装で手に扇子を持つのみである。王は非常に気づかわれて、身軽になる様御沙汰があつたが、先生は平然としてづかづか欄の中に入り、扇子を以て身構えるのみ。試合は如何にと云えば、件の巨牛は三四度突掛つて来たが、其の都度先生の為に目を突かれて恐れを為し、先生が進めば、尻込みして逃げ廻るばかりである。観衆は全く驚嘆し先生の評ばんが益々盛んになったそうであつた。先生はいつも、私達に武人の用意周頭さ、如何に頭の働きの必要であるかを説かれて居た。序に、屋部憲通君は先生のお隣りであつたので、予程先生から可愛がられて居た一人である。

当間親雲上は、これ又松村時代の人で、力量衆に勝れ熱心なる唐手の研究家であつた。

野村は身の丈五尺五寸余の巨漢で、体軀堂々一撃のもとに人を突き倒すのに妙を得て居たという。そして彼の一撃に堪える者がなく、一代の拳骨武士として後世にその名を残した。

大城と金城は、共に同時代の人である。大城は力量にすぐれ研究に余念なく、金城は筋骨隆々、姿勢を正して拳骨を握る時、その堅きこと正に石の如きものがあつたと言う。

筑佐事儀間は、力量の点に於て、並ぶものなく、武人として後世の人に唄われ釵をよくしたと伝えられる寒川の石嶺は、身軽で技が敏捷で、且つ伝統的唐手の保持者として知られて居る。

尚近代の武人中智慧者佐久間は、井戸の中に飛び込み、両股を張って身を宙間に支え、水中に落ちることがなかったという。亦席を身体に巻付け、只両手と頭のみを出して一氣に四尺の席の中を飛び出したとは苦心の程が伺われる。

国頭は熱心なる研究家で技も早く多和田の足技も共に並び称された。

喜屋武は有名な人で身体の固きこと金鉄の如きものがあつた。

豊見城親方は、近代の武人で、糸洲翁と時代を等しくし、コイ流の名人でもあつた。其の愛弟子としては現に伊是名朝睦氏が存命中である。豊見城は亦鎗術にも長じていて、それは唐手以上という評があり、殊に馬上に於ける鎗術が得意で、彼が六尺豊かな栗毛の馬に股がって槍を執る時、如何なる強敵も尻込みしたそうである。

豊見城と同時代の人に、玉城親方という人があつたが、彼は真喜屋の高弟として師の寵愛を受け而も乗馬術の達人で、シントウ流をよくし、弓にも長じていた。此の二人は琉球に於ける馬術双璧と云つたわれている。

牧志は、縄切りの名人で、彼はよく縄で自分の身体を二重三重に巻き付け気合もろとも縄を見事に切ることが出来た。亦白布の木綿で頑丈に頭に八巻をさせ、その八巻を頭を一振り振って抜きとつたそうである。

安里・糸洲の両翁は極く最近の首里の武人である。安里翁は身体が軽く技が素早く、糸洲翁は専ら研究的態度で終始し巻藁の稽古に熱心で近代の武人としては稀に見る突き手であつた。

右の両氏より、やや後輩に属するが突手として知られている、首里の喜友名と板良敷の二翁がいる。板良敷はアカー山として知られ、現在八十一歳の高壽であるが、元氣壯者をしのぐものがある。身軀偉大、馬術もよくし、唐手は洗練されたる技術の保持者である。亦氏は八重山節の名歌手でも

ある。

那覇に於ける武人には、首里の上原時代の具志が尤も有名で、敏捷なる早業と突手で知られている。

長濱は突手の名人で糸洲翁が師事した人である。

桑江は、当時那覇に於て長濱氏と並称された人で、身体の固きこと金鉄のごとく真に偉丈夫であった。

泊の武人中では、何といつても松茂良・親泊・山田の三者が抜群の譽を勝ち得ている。

松茂良は、突手の名人で自分（著者）も時々伺つて教えを乞うたが先生の教授法は、絶えず弟子に工夫させて居られた。琉球の唐手教授法は概してそうで、工夫しない人々の技は、中々進歩しない、只々身体を堅くするのみである。

親泊は、足技の達人であつた。山田に至つては身体を固くするという特技の持主で、桑江氏と共に、この点で並称されている。

その他糸洲時代の久米村の武人、村山は力量衆に秀で、稀代の壮漢であつた。

最後に、城間村の棒古波蔵と古波蔵村の宮平を紹介して、この稿を終るが、昔より琉球の武人は、唐手のみで終始せず、何れも特技を有していた。この二人者も、亦棒と乗馬術に秀で、古波蔵は松村時代の棒者として一二を争つた。

宮平も、同時代の武人として相当名を知られ亦乗馬術の達人として大いに斯界に名を馳せ巨軀の持主であつた。

近代武人の逸話

斯界の麒麟児具志川思亀武勇伝

世に佐部の親方として、後世に名を残した西平親方の高弟に赤平の人具志川思亀（うみかめ）がある。彼は、もと羽地家の出にして、兄は雲巖といい、琉球の名僧としてよく知られている。而して彼も亦鬼をも拉いじぐような武談逸話の持主として知られ、名を後世に残した。当時、琉球政府に於ては若衆という職制があり、其の頃年齒僅かに十三歳の彼は、若衆として城勤めをなしていたのであるが、或る日、思亀が同じ若衆の友達二三名と打ち連れて城内よりの帰途さ、タマタマ阿旦川の前を通りかかった所、余りに咽喉が渴き、水が欲しくなつたので川の辺に汲みおいて桶の水を無断に飲み干したのである。所が最前より此の有様を凝視していた中田殿内の下男某は、烈火の如く憤り、強力無双をもって恐れられてるのを鼻にかけ思亀の襟首を捕え、詫わづるのも諸もろかず傍若無人の振舞いを敢てし、猶も太い拳骨を彼の頭上に見舞つた。流石さすがの彼も泣きながら家に逃げ帰り、その由を父親方に物語つた。それから彼は彼の下男よりうけた恥辱を是非雪はらがんものと、涙ながらに父親方に乞い、当時天下に名を馳せていた佐部の親方に懇願して弟子となつたのである。尤も佐部の親方は思亀を一見せられただけで、

「こは将来、琉球随一の武人となり、後世に屹きと度名をなすであろう」と観破せられ、父親方より万事を引受け、自ら手にとって唐手の指南をされた。其後数年ならずして思亀は一角の武となり、

十六の時からは師匠佐部の親方の高弟として許されたが、些しも奢りたかぶることもなく、常に謙讓の態度で人に接し、斯界の麒麟児として高名をほしいままにしたという。

殊に、彼が沈勇たりしことは、之亦色々の口碑として後世に伝えられているが、其の一二を挙げれば、或る時佐部の親方が彼の武人としての注意力を試さんとせられ、敷居越しに彼の名を呼んだ所、彼は平然として敷居の所に三指をつきて膝まづき、手にせる扇子をもって敷居の溝におき、以て襖を閉められた時の用心にした。師匠佐部の親方は之を見て僅か十六才の彼が斯程までに物事に注意深く、且つ武士としての沈着を常に忘れない態度を激賞されたそうである。尚、彼が十七才の折、嘗て阿旦川に於て彼の強力無双の下男よりうけた恥辱を雪ぐべく御前試合を師を介して言上した。愈々兩三日の中に平良馬場に於て真剣勝負を決するという或る日のこと彼は高軒をかいて四畳半の自分の座敷に午睡をしていた。折りしも師匠佐部の親方は思亀の許に訪ねられ、座敷におけるかの豪胆なる寝態を見られ、父親方の面前で六尺棒をしごいて打ってかゝられた。処が寝ていた筈の彼はガバと跳ね起き、あたりに積み重ねてあった畳を以て師匠から打ち込まれた棒を受け流し、以て平然たりしという。

斯くて彼は僅々数年の中に佐部の親方の薫育を受けて琉球随一の武人となり、平良馬場の御前試合に於て、見事彼の強力無双の下男を一撃のもとに打ち倒し、後世にその名を馳せたのである。

奇智に富んだ渡嘉敷親雲上

琉球の武人の中、奇智に富み、亦世人から智慧者として愛された人に渡嘉敷親雲上がある。彼は、

首里崎山の産で、琉球の曾呂利新左衛門の名があり、亦酒豪としても聞こえていた。

嘗て彼は薩摩に船役人として派遣されたことがある。当時薩摩においても彼の武勇が知られて居たとみえ、或る日御前に於て薩摩の武士より試合を挑まれ、彼は止むなく立合うことになった。そして奇智に長けて居た彼は、試合の条件として長廊下にゴザを敷き、其の上で試合をなさんと提議した。それは許されて当時薩摩随一の武士某と試合うこと、なり、双方寸分の隙をも見せず立合つた。一度び相手がエイツと掛け声もろとも打ちかゝるや、ヒラリと体を変し、スバヤク莫莖モクキョウの一端を引いて相手の人を倒し、見事彼は勝を制して、島津公よりお褒めの言葉を賜つたという事である。又当時薩摩に於ては、一定の期間と場所を限つて、斬捨御免を許されていたのであるが、彼はわざわざ通行止の禁を犯して其の場所に至り、六尺棒を振つて薩摩隼人を悩ましたという。而も或る時の如き、四五名の若武士と立ちむかい、見事に薙はぎ倒し、決して彼等が再び斬捨御免などという浅ましい所業をせぬという詫状一札を取り、悦に入っていたというのが如き、実に武人としてのお目出度話で、当時の悪制度に茶々を入れるなど、琉球人として稀に見る愉快な人であろう。

田舎相撲に勝った豊見城里之子

ゴイ流（馬術の一流儀）の名人として唄われ、且つ槍術の達人として知られた豊見城親方の青年時代にも亦田舎相撲をとりしづめた美談がある。

彼がちょうど二十四才の時であつた。或る夏の日、愛馬に股がって勝連南風原に遠乗りした時、丁度馬場において田舎相撲が行われて居て其の中の一人の荒くれ男のために入り替り立ち替り皆な

ぎ倒され、中には土俵の砂を口にすり込まれる者もあって、皆かの若者の為に散々な目にあわされで引き下って行くのであった。之を見て性来俠氣にとんだ豊見城は、彼の若者の人もなげなる挙動を怒り、直ちに馬上よりおりて、着物と袴をかなぐりすて、彼の勝ち誇った若者と相撲をとり、見事土俵に投げつけて、砂を口中に思う存分喰わせたことがある。

かくれたる棒の達人糸満マギー

武人というよりは、単に棒の達人として世に知られたる近世の朴訥漢糸満マギーにも亦面白いエピソードがある。彼は今から約百五十年前の人で、糸満で呱呱の声をあげ、池の前小のマギーと称されて、世人からその名を唄われていた。由来、糸満は琉球唯一の漁村として知られ、村民は男女を問ず、拳こぶって漁業にたずさわるのであるが、彼は幼い時から漁業を嫌い、朝から晩迄隣り近所の子供を相手に棒切れを振り廻し、大いに腕白子僧振を發揮していた。後、成長して身の丈六尺一寸、体重実に二百有余貫の偉丈夫となり、幼い時からの悪戯が役に立って、二十才位には早や一角の棒者として斯界の人々から知られていた。殊に角力に至っては、古今独歩と称せられ、琉球角力界に於て、嶄然と頭角を現わし、百五十年来彼と並ぶ者がなかったのである。強で近代の力士中より、彼の面目に彷彿する力士を求むれば、先ず西原村伊保の濱の米須氏位で、僅かに其の面影を求め得るに過ぎないと思う。

斯く思い浮べる時、当時彼の真価を考証すべき一挿話がある。それは或る時、首里の豊見城親方と、那覇の崎山とが、共に連れ立って彼を訪れ、其の腕前を試みとしたことである。崎山が彼に棒

の試合を申込んだ所、彼は怪訝な顔をして、「失礼では御座るが、貴男方は、お見掛けした処、未だお年も若い。私と立ち合うなぞとは以ての外である。それに私の棒は、世間にこそ余り知れていないが、自慢の角力以上に人一倍の苦勞をしたもので、自分では一角の棒者のつもりでいる。亦その上、体重の上でも、貴男方とは十斤二十斤の違いなら未だしも八九十斤も隔っている。如何してお相手なぞ出来ましょう。お帰りになつて、尚一層懸命に武を練られた方が将来のお為で御座る。昔から、

「歌者は声量、武者は力量」という諺も御座るから、よくよく稽古を励まれ、あつぱれ琉球一になって立合つた所で決して貴男方の名譽となることは少しも御座いませぬ。却つて今までのお名譽にキズつけるものと申しましょう……。」

ときつぱり断つた。然し崎山の懇望いなみ難く、彼も一二合立合つた処、呵々大笑、

「最前も申上げた通り、失礼では御座るが、貴男方のお腕前では未だ未だ私には及びませぬ。更に武を練つて後日、又お出でになつた方がよろしゅう御座います。更に相手になることがなかつた。彼マギーと豊見城との体重の相違六十斤、崎山とは九十斤にも及び、彼マギーにとつては、全く問題にならなかつたのである。道豪胆の豊見城親方も果然として、二人は只彼の腕前を嘆賞しスタコラストコロ首里に帰つたのは正に珍中の珍談である。」

尚

武

陸軍大將

男爵大井成元題

陸軍大將一等功一從二位男爵

貴族院議員 大井成元閣下題字